



㊤原稿を読んで、書籍を「音」に置き換える音訳の作業場
 ㊦書籍を「音」に置き換えた音訳CD。徐々に増えているが、まだまだ十分とはいえない



電子書籍と融合 新たなメディアに



「音訳CDはまだまだ不十分」と訴える利用者の山口通さん

➡ 利用者の気持ち優先

「目の前で拍手をされ、感謝してほしい人は、やめた方がいい」

松本久美子さん(65)は、朝日カルチャーセンター(東京・西新宿)で、音訳ボランティア希望者のための講師をしている。音訳はただ文章を読むだけでなく独特のセンスが必要だという。

たとえば写真を音訳するケース。通り一辺倒の説明ではなく、言葉だけで映像を頭に描ける文章にする必要がある。長すぎてもいけない。こうしたさまざまな制約の中で工夫して音訳する方法を教えている。

ただ、松本さんは「音訳」ボランティアに必要なものは、読み方の技術や音質などではなく、利用者の気持ちを考えることだという。

「何のために自分の声が必要とされているのかを考え、必要とされているものを必要としている人に、必要な形

で届けることが大切」と松本さん。

特に音訳ボランティアは利用者の反応が直接的には見えにくい。「感謝」という手応えが感じられないと気が済まない人には音訳ボランティアは向かないというのが、松本さんの正直な気持ちだ。

一般の人にも恩恵

音訳CDのメディアとしての可能性について、スポンサーに依存しない週刊誌「週刊金曜日」に勤める元毎日新聞記者の北村肇さん(60)に聞いた。

「良い編集者ならば弱者ではなく弱者の権利を守るために記事を書く。マスメディアの本来の役割を理解すれば、出版社全体の『音訳』に対する見方は確実に変わってくる」

出版社も私企業である以上、利益を出す必要がある。現在はボランティアに支えられている音訳CDがビジネスとして成り立つ可能性はあるのだろうか。

北村さんは「すでに起きていることだが、出版業界も電子化の波に襲われる。新聞にしる雑誌にしる、部数が伸び悩んでいるものが大多数」と話す。出版業界も新たなビジネスチャンスを探っている。

「電子と音訳出版は敵対関係にはない。むしろお互いに足りない要素を補い合う関係にあるのでは」と北村さんは言う。電子出版物と音訳が融合によって、新しい可能性が見えてくる。

「音訳出版物」が当たり前になれば、恩恵を受けるのは、視覚障害者だけではない。

たとえば満員電車で新聞を広げずに、イヤホンで新聞を聴くことができれば便利だ。一日の仕事を終えて目が疲れているときには、音訳小説を聴いたり、音訳雑誌から情報を得たりできる。

ビジネスとして多くの出版社が音訳に参入すれば、新たな情報メディアが誕生するのではないのだろうか。

編集後記

付加価値にいかが？

携帯音楽再生プレーヤーの進歩は飛躍的だ。カセットからCD、MD、そしてMP3へ。私が生まれてからまだ20年しかたっていないのに、回転扉のように次々と新しいものが登場し消えていった。私たちは、「音」を携帯する生活にすっかり慣れ親しんでいる。

ただ、プレーヤーは変わっても、ソフトは大半が娯楽用の音楽であったり、英会話や資格試験の教材であったり、カセットテープの時代と大差はない。「古典文学朗読集」といったCDは販売されているが、高級品という印象が強い。

もっと新たな可能性があるのではないかと考えたことが、「音訳」を取材するきっかけになった。

取材を通じて、音訳はまだボランティアの域を出ていないことが分かった。一方で、電子書籍と音訳がタッグを組むことによるビジネス展開の可能性も見えてきた。ニーズは、視覚障害者向けだけではなくとどまらない。例えば、電子書籍の付加価値として「音訳」を付けてみれば、おもしろいと思うのだが。出版社の皆さま、いかがだろうか。

「読書をしているときは身の不自由を忘れるものです。それは、書物の世界が自由と明るさと癒やしを与えてくれるからです」。日本点字図書館のホームページにこんな言葉があった。

出版業界はもちろんのこと、一人でも多くの人が音訳に関心を持ってほしいと思った。(鈴木あきほ)